

サルトルと第三世界 (2)

澤 田 直

承前

はじめに

本稿ではジャン＝ポール・サルトルとマグレブ（北アフリカ）、とりわけアルジェリアとの関係を社会背景も交えて考察することにした。サルトルと第三世界との関わりを便宜的に分類するとすれば、マグレブとラテンアメリカという二つの極が認められる、と前回述べた。だが、両者には多くの点で違いが見られる。ラテンアメリカへの関心は、キューバ革命という同時代の重要な政治的実験場を現地へ赴いてみずからの目で見、現地の人びとと意見を交わすというありかたで展開した。前回検討した通りである。一方、フランスの植民地の一部であったマグレブに関しては、内政と関わる問題という側面もあり、サルトルだけでなく、多くの知識人にとってみずからのフランスにおける政治的立場とも連動するものであった。とりわけ、1950年代半ばに始まるアルジェリア独立闘争は、フランスの全国民を巻き込む社会的問題であったから、純粋に植民地主義という理念の問題として議論されることはむしろ稀であり、フランスの国益、さらには右派左派それぞれの勢力争いという形の発言も少なくなかった。その一方で、これもすでに見たようにキューバ革命は、ほぼ同時に進行していたアルジェリア独立問題に光を投げかけるものとして捉えられていたふしもある。以上のことを心に留めながら、サルトルとマグレブ、とりわけアルジェリア戦争との関わりを検証することにした¹⁾。

1830年にフランス軍が侵攻して以来、アルジェリアはフランスの最も重要な植民地と位置づけられた²⁾。それは他の植民地とは異なり、積極的な入植が行われた唯一の場所であったこと、また1848年、第二共和制下でフランス国内の県に準じた3県が置かれ、議員や首長の選挙が（形式的にはあれ）行われ、フランスの国土と見なされたためでもあった。ア

ルジェリア戦争の際に、入植者のみならず、多くの国民が「フランスのアルジェリア (L'Algérie française)」と叫んだ理由にはそのような背景がある。もちろん、その論理は虚妄であり、アルジェリアで国政に参加できたのはフランス人、そして後にクレミュール政令によって帰化を認められたユダヤ人だけで、それ以外の現地人は蚊帳の外にあった。本稿では複雑を極めるアルジェリア植民地の背景と独立戦争を概観することは到底できないので、サルトルとの関係でのみ事実関係を追いながら、彼の行動と発言を分析するにとどめたい。

1 前史

まずはアルジェリア戦争に先立つサルトルとマグレブの関係を見てみよう。青年期のサルトルにとって植民地問題はほとんど意識の表面に昇っておらず、むしろ、19世紀以来のフランス文学の伝統に追いついて、オリエンタリズム全般をエキゾチックな場所として捉えていた節があり、その点では他の多くのフランス人と大差ない³⁾。例えば、短篇小説「部屋」の冒頭には典型的なくだりが見て取れる。

ダルダベ夫人はラハト・ルクムを指でつまみあげた。それを注意深く唇のほうへと近づけ、うっすらと撒かれた細かい粉砂糖を吹き飛ばさないように息をひそめた。「これはバラの味ね」と彼女は独り言を言った。そして一挙にこの半透明な肉に噛みついた。すると、よどんだ香りが口のなかに広がった。「病気になる感覚がするどくなるなんて不思議ね」。モスクや追従たっぷりの東洋人たちのことを考えはじめると（新婚旅行でアルジェに行ったのだった）、彼女の青ざめた唇に微笑が浮かんだ。ラハト・ルクムもまた追従的だった⁴⁾。

ラハト・ルクムとは「喉の休息」を意味するトルコの伝統的な菓子で、砂糖にデンプンとナッツ（クルミ、ピスタチオ、アーモンド、ヘーゼルナッツ、ココナッツ）を加えて作る。ギリシャも含めオリエンタリズム全般で作られ、フランスでも19世紀から知られていたもので、典型的なエキゾチックな小道具と言える。ここには植民地批判の萌芽も見ることはいできない。

一方、サルトルの出世作、『嘔吐』(1938)には、世界各地の都市に混じって、マラケシュ、テットウアン、モロッコ、アルジェリア、メクネス、アルジェ、タンジールといった地名が出てくるが、それらの街は記号のご

ときものであり、内容も実態もない。例えば、「上海、モスクワ、アルジェは二週間もいるとどれもこれもまったく同じになる⁵⁾」と記すロカンタンの詠嘆は単にエキゾチズムへの幻滅を語るための例でしかない。メクネスの挿話はさらに紋切り型でひどいものだ。

一人のモロッコ人が私に襲いかかって、大きなナイフで切りつけてきた。しかし私は彼に拳固の一撃を加え、それがこめかみの下に当たった……。すると彼はアラブ語でわめきだし、風のたかったようなむさくるしい連中が大勢あらわれて、わたしたちをアタラン市場まで追いかけてきた⁶⁾。

このスタンスはその後あまり変化はなく、『自由への道』第二部「猶予」では、第二次世界大戦勃発が目前に迫った1938年9月が描かれるが、フランス、ドイツ、チェコ、スペインと並んで、モロッコでの光景もある。マラケシュの街を馬車で散策する、にわかカップルのモードとピエールの挿話⁷⁾だが、彼らの視線、そしてそれを描く語り手の視線に植民地問題への意識を読み取ることは難しいだろう。

サルトル自身は1932年と38年の夏季休暇をモロッコで過ごしている。ボーヴォワールの回想録から読み取れるのは、純粹にヴァカンスを楽しんでいる二人の姿だ。32年の旅行「テトゥアンで、私はモロッコのスークの雑踏、その影と光、強烈な色彩、皮や香料の香り、銅を打ち叩く音などを発見して有頂天だった」(FA I, 455-456/上 103)とボーヴォワールは語り、38年の旅行ではカサブランカ、ラバト、フェズ、メクネスなどを訪れているが、ヨーロッパ人街はつまらないといった記述やピトレスクな情景が語られる (FA I, 659-664/上 307-312)。

また、サルトルによるカミュの『異邦人』の解説を見ても、アルジェリアへの明示的な言及は一ヶ所、「アルジェの永遠の夏、これが彼の季節だ⁸⁾」にすぎない。もちろん、後にサイドが鋭く批判することになるオリエンタリズムの問題が不在であるといってサルトルを非難するには及ばないだろう⁹⁾。

サルトルとボーヴォワールがアルジェリアを実際に訪れるのは戦後、1948年夏のことになる¹⁰⁾。きっかけはアフリカの現状を自分の目で確か

めるようミシェル・レリスから勧められたことだった (FC I, 1146/ 上 222)。
したがって、植民地問題への関心があったことは間違いない。この時点でサルトルは一方でユダヤ人の差別問題、他方でアメリカにおける黒人差別に大きな関心を抱いており、これまでの単なる物見遊山とは違う意図が確かにある。とはいえ、アルジェからガルダイアやタマンラセットなどの砂漠地方を通してバマコまで行くことにした二人にとって、アルジェはあくまで出発点に過ぎなかったようで、ポーヴォワールの回想録にはアルジェリアに関してはほとんど具体的な言及が見られない (FC I, 1146-1166/ 上 222-240)。そして、この旅行の後、二人はモロッコで二週間 (メクネス、フェス、カサブランカ、マラケシュ) を過ごしているが (FC I, 1166/ 上 240-241)、これはいつもながらのヴァカンスの様相を呈している。こうして見ていくと、サルトルとマグレブの直接的な交流は拍子抜けするほど希薄だ¹¹⁾。じっさい、サルトルが植民地や第三世界について意識するようになるのは、バンドン会議以降と見てよさそうである¹²⁾。第二次世界大戦後のサルトルにとって抑圧の問題は、ユダヤ人、黒人、階級闘争の枠組みで考えられていたが、アルジェリア問題が前景に表れる箇所は見当たらない。1948年の「黒いオルフェ」の場合でも、植民地の問題、入植者と現地人の関係は語られているが、黒人と白人という二項対立が基調である。当時のフランス人にとって最大の問題はインドシナであったし、1950年のディエン・ビエン・フーでの敗北は、まさにフランス植民地の解体の始まりとして危機感をもって捉えられた。その一方で、この時代のサルトルの関心は冷戦構造下でどのような態度を取るかにあり、東西のどちらの陣営にも与しない第三の道の模索に向っていた。民族解放戦線 (FLN) が1948年に結成され、1954年の武装蜂起以前にも多くの衝突が起こっていたにもかかわらず、サルトルはマグレブの問題をほとんど意識していなかったように思われる。1955年のヘルシンキの世界和平会議での発言では植民地政策を批判し、フランス政府に対して北アフリカの独立の要求を認めるように提案しているが、それも平和を望むことと自由を望むことは一つの同じことだという結論に表れているように、アジア・アフリカの植民地一般の枠組みの話である¹³⁾。その態度が変わるのが1956年ごろだ。

1964年に刊行された『シチュアシオンV』は「植民地と新植民地」と副題されているが、冒頭に置かれたカルティエ＝ブレスソンの写真集と、最後の2篇、つまりファノンの『地に呪われたる者』への序文と「パトリ

スルムンバの政治思想」を除いた残りの10篇はすべて北アフリカ、アルジェリア戦争に関係したものであり、その意味で、植民地の問題＝アルジェリア問題と考えても差し支えない。その傾向を便宜的に分類してみると、1) 植民地体制そのものについての考察、2) 拷問や不服従などアルジェリア戦争の被害者を支援する文書、3) 新たなファシズムとド・ゴール批判を中心としたフランスの内政に関するものと言える。『シチュアションV』に収録されなかったこの時代の発言に関しても2)なり3)に分類されるが、それらはサルトル自身の主宰する『現代』誌を中心に、『フランス・オブセルヴァトゥール』『ル・モンド』『エスプリ』『エクスプレス』といった左派の新聞や雑誌に発表された。これらの主題を意識しながら時系列に従って、サルトルの発言と行動を追っておくことにしよう。

じつは、アルジェリア問題にいち早く反応したのは、サルトル自身よりも、彼が主宰する『現代』誌であった。それには戦争にかりだされる若者たちと近い30代の知識人たちによって編集部が実質的に運営されていたことも与っていると思われる。後に見るようにマルセル・ベジャ、フランシス・ジャンソン、クロード・ランズマンといった面々である。

2 『現代』誌

アルジェリア戦争は、1954年11月1日、アルジェリア民族解放戦線(FLN)が武装蜂起したことで始まった。1955年8月にはモロッコで暴動、アルジェリアのコンスタンチヌ県でもFLNの大規模な行動があった。チュニジア・モロッコでも民族運動が盛り上がり、反仏暴動を経て、翌1956年にはそれぞれ独立を達成した(当初はフランス連合内ではあったが)。

『現代』誌は1955年10月号に「従順を拒否する¹⁴⁾」という論説を掲げ、すぐさまアルジェリア独立を支持した。この論説はアルジェリアを「植民地」と明確に位置づけているが、この位置づけは当時の常識とは異なっていた。公式見解によればアルジェリアはフランスの一部であり、国民の多くもそのように考えていた。翌11月号で『現代』誌の論調はさらに急進化する。表紙には、冒頭の論説「アルジェリアはフランスではない」のスローガンが踊り、ジャン・コーエンによる「植民地主義とアルジェリアにおける人種差別」、モハメド・シェリフ・サハリによる「[同化]から[統

合」, 政治的欺瞞」が連なった¹⁵⁾。『現代』誌はすでにインドシナの独立戦争についても論陣を張ったが、アルジェリア事情に通じていた若く気鋭の知識人たちが編集部やその周辺にいたために、反応はきわめて早くまた先鋭的であった。とりわけ中心になっていたのは当時実質的な編集責任者であったマルセル・ペジュである¹⁶⁾。彼は早くからFLNと直接にコネクションを持っていた。ここで留意したいのは、植民地問題に対して既成の左翼は及び腰どころか、むしろ植民地主義を維持することを支持したことである。

『現代』誌に近い人物ではサルトルの同世代の無政府主義者ダニエル・ゲラン¹⁷⁾がアルジェリア問題に早くから関与していた。彼は1952年に北アフリカを3ヶ月旅行し、現地の人びとの声を聞いて、状況をつぶさに伝える「マグレブに哀れみ」という論考を1953年に公表して、つとにアルジェリア問題の核心を炙り出していた¹⁸⁾。その論調はアルジェリア独立運動との連帯を呼びかけるものであったから、当時のフランスの世論からすればきわめて急進的と言える。

だがより広く世論を動かしたのは、カトリック系の記者ロベール・バラである。彼は当時の内相ミッテランに随行してアルジェリアに赴き、独立運動のメンバーと会見するような立場にあったが、彼らの実態を1955年9月「アルジェリアの〈暴徒〉たちを訪ねて」という記事にして『フランス・オブセルヴァトゥール』に発表¹⁹⁾したため逮捕された。この記事は、単に〈暴徒〉と呼ばれていた集団が、じつは民族解放軍ALN (Armée de libération nationale) という名称の軍隊であり、その上には民族解放戦線FLN (Front de libération nationale) という政治組織があることをフランス国民に知らしめた点できわめて重要なものだった。

サルトルの唯一の弟子とも言えるフランシス・ジャンソンもまたアルジェリアで働いた経験があり、その惨状をみずからの目で見ていた一人である。彼の妻コレットは1955年に3回にわたってアルジェリアを訪れ、独立派の活動家と会い、FLNのリーダーにインタビューを行った。1955年12月、ジャンソン夫妻は『法の外のアルジェリア²⁰⁾』を発表したが、その内容はアルジェリアの独立をめざすFLNの戦いとそれに対するフランス植民地軍の弾圧を描き、FLNを公然と支持するものだった。批判性を欠いた支持だとゲランでさえ留保をつけたが、その衝撃は大きかった。

彼らと比べるとサルトル自身の介入はずっと限定的でかつ遅く、1956年になってからである。1955年11月5日に「北アフリカにおける戦争継

続に反対する知識人行動委員会 (Comité d'Action des intellectuels contre la poursuite de la guerre en Afrique du Nord)」がディオニス・マスコロ、ロベール・アンテルム、エドガー・モランらによって作られた。同委員会は1956年1月27日にヴァグラム・ホールで大集会を開催。サルトルも、アリウン・ジョップ、エメ・セゼール、ミシェル・レリス、ダニエル・ゲラン、ジャン＝ジャック・マイユ、ジャン・アムルーシュ、ロベール・バラ、ジャン・ドレシュなどと共に参加²¹⁾。この動きで興味深いことは、後に見る「121人の署名」と同様、マルグリット・デュラスを中心に形成されていたサン＝ブノワ・グループのメンバーが起点になっていることだ。また、参加者の多くがサルトルらの次の世代の知識人、作家であり、サルトルよりも上の世代が少ないことも象徴的だ²²⁾。

ここでのサルトルの発言は「植民地主義は一つの体制である」と題されて『現代』誌にエメ・セゼールの発言²³⁾と共に掲載された。このテキストは、サルトルのアルジェリア問題に関する最も本質的で最も深い考察である。この号の『現代』誌の論説もアルジェリアに関するもの、より正確に言えば、1956年3月12日、社会党のギー・モレ率いるフランス政府が国民議会で可決させた「特別権限 (Pouvoirs spéciaux)」に関するものである。「秩序再建のためにあらゆる例外的措置を取る」ことができるとするこの「特別権限」を、論説はアルジェリア和平を脅かすものとして糾弾するが、これは左翼政権と対決し、アルジェリア独立を支持するより広範な左派勢力の結集を目指すことと言える²⁴⁾。じっさい、共産党は北アフリカの平和は唱えながらも、決して独立については語らなっただけでなく、支援を問題にすることもなかったのであり、『現代』誌はそれとは反対にアルジェリア問題に関する多数の論文や証言を掲載²⁵⁾することによって、何度か差押え処分を受けることになる²⁶⁾。とはいえ、サルトル自身は『弁証法的理性批判』の執筆に没頭しており、表だつた介入はしていない²⁷⁾。

3 体制としての植民地

「植民地主義は一つの体制である」の骨子を見てみよう。サルトルは具体的な数字を挙げながら、アルジェリアが植民地に他ならないこと、そして、19世紀の入植以来、現地人から富を組織的に収奪する変わらない構造があり、問題は個々の入植者の善良さとも、経済政策とも無関係であること、問題はシステムとしての植民地主義であることを縷々説明する。そ

して、よく見られる「新植民地主義の欺瞞」、つまり問題を経済、社会、心理に還元する見解を避けなければならないと注意を促す。その上で、1848年に遡って問題を考察し、第三共和国の立役者として知られ、国民皆教育など多くの改革を実現したジュール・フェリーが同時に植民地推進の中心人物でもあったことを指摘する。こうしてフランス共和国そのものの黒歴史としての植民地が俎上に載せられるのである。

ここでサルトルは「植民地体制」が抽象的な機構ではなく、実在し、機能する恐ろしい現実であり、植民者のうちに染み込み、彼らの思考、言葉、行動の原理となっていることを強調する (*Sit. V*, 43/32)。さらに植民者が祖国フランスとみずからの国アルジェリアの二重構造を生きる矛盾した存在であると指摘する。つまり、フランス人としては、自由な資本主義とブルジョワ民主主義を信奉し、それに付随する投票権、思想の自由を認めるが、これらの普遍的価値は現地の人間には適用されないフランス本国のものであるという歪んだ構造を持っており、それは自己欺瞞によって彼らには隠蔽されている。そこから植民者は現地人を「人間以下」の存在と見なさざるを得なくなるとサルトルは喝破する (*Sit. V*, 44/33)。つまり、植民者はフランス人としては共和主義者でありながら、アルジェリアで生きるフランス人としては「共和制を忌み嫌い、共和国軍隊を熱愛するファシスト」 (*Sit. V*, 45/34) になるという矛盾した存在になるのだ。サルトルの出す結論は明白だ。今やこのような矛盾した体制は崩壊の一步手前にあり、この体制を清算しなければならない。「自由なフランスと、自由になったアルジェリアとの間に、新しい関係をアルジェリア人と一緒に築き上げる」ために、「アルジェリア人民の側に立って、植民地の暴政からアルジェリア人とフランス人を同時に解放すべく戦うこと」 (*Sit. V*, 47/35) が急務なのだ。

同時期のもう一つ重要な論考は、チュニジア系ユダヤ人作家アルベール・メンミの著作の紹介、「植民者の肖像と被植民者の肖像²⁸⁾」である。ここでもサルトルは植民地体制に人種主義が刻印されていることを指摘する。メンミがみずからの経験に即して状況を語っていたことをシステムの問題として論じた上で、植民地社会は自己崩壊せずには現地人を統合することができない点に着目する (*Sit. V*, 55-56/41)。階級闘争的な言葉で語られている部分もあるが、植民地に内在する問題が整理されており、この時

点でのフランスのアルジェリア問題の診断として際立っていると言えるだろう。

以上の主張は現在の観点から見れば、さほど目新しい議論には見えないが、1956年の時点では大多数のフランス人には到底受け入れられない主張だったと思われる。すでに述べたように、「フランスのアルジェリア」という認識は大多数のフランス国民に共有されたものだった。その国民感情が変わっていくにはアルジェリアの惨状が広く国民に知られる必要があったが、次第に明らかになってきたのが、軍部による拷問の常態化である。

4 拷問をめぐる

1957年になると、アルジェリア戦争の激化にともない、フランス軍のすさまじい弾圧や拷問の様子が次第に告発され、資料や書物も相次いで出版されるようになった。

1957年2月カトリック系新聞『キリストの証言』が「ジャン・ミュレールの記録」を発表。3月には、カトリック思想家で『エスプリ』編集長のジャン＝マリ・ドムナック、これもカトリック作家であるフランソワ・モーリアックが中心となった精神的抵抗委員会が「フランス召集兵たちの証言」を出版²⁹⁾。序文では、フランス軍による捕虜の拷問、一般住民に対する残虐行為などが詳細に報告され、これを知らしめることがフランス人としての自分たちの責任である、としている。サルトルもすぐさまこの意図を支持し『ル・モンド』に一文を書いたが、過激との理由で掲載を拒否された。少し手直しをしたのが、『現代』誌に掲載された「みなさんは素晴らしい」である³⁰⁾。見せかけの人道主義ではなく、フランスが信じられないような非人道的行為をアルジェリアで行っている事実を誰もが知るべきであり、それによって、そこから抜け出すことができると説いている。

これに続いてさらに波紋を呼ぶ書物が出版される。1958年2月に刊行されたアンリ・アレグの『尋問』³¹⁾である。アレグは、アルジェリア共産党員で『アルジェ・レピュブリカン』紙の編集長だったが、同紙の報道がアルジェリア民族主義寄りで見なされ、1955年9月に同紙が発禁処分を受けたのみならず、57年6月には彼自身も逮捕され、一ヶ月不法監禁されて厳しい尋問を受けた。サルトルはすぐさま「一つの勝利」を『エクス

プレス』に発表して、この書を解説した³²⁾。アレグの書は大ベストセラーとなったが、3月には「国防を危うくする」として発禁処分。サルトルの書評を掲載した『エクスプレス』も発禁処分となった³³⁾。この解説で、サルトルは、拷問と植民地主義体制が一体となっていることを指摘。フランスを恥辱から、アルジェリア人を地獄から救おうとするなら手段は一つしかない、交渉を開始し、平和を結ぶことだと結論する。さらに、5月30日にはモーリアック、シュヴァルツなどとともに、アルジェにおける人権侵害に抗議する記者会見³⁴⁾を行ない、そこでも知識人やジャーナリストはこの問題について積極的に情報を広めることが責務だと主張した。

じっさい、拷問はアルジェリア戦争においては重要な論点であっただけでなく、サルトルにとっても以前から重要な主題であった。彼はすでに戯曲『墓場なき死者たち』でレジスタンスの際にドイツ軍によって行われた拷問を主題にしていたからである。アルジェリア戦争における拷問は執筆中の『アルトナの幽閉者』に組み込まれることになる³⁵⁾。

ここで、併せて思い起こしたいのは、話は少し後1959年9月のことになるが、ボーヴォワールがジゼル・アリミとともに行ったジャミラ・ブーパシャ (Djamila Boupacha) 救済の活動である (FC, II, 221-222/下 229-231)。FLNの女性メンバーであったジャミラは、アルジェで爆弾テロ未遂事件が発生した際に容疑者として逮捕された。彼女は無実を主張したが、電気ショックのほか、膣への瓶挿入などの凄惨な拷問が連日にわたって行われ、数日間も意識不明に陥った。これを知った弁護士ジゼル・アリミが抗議運動を開始。ジゼル・アリミはチュニジア出身の弁護士で、独立戦争のパルチザン〈フェラガ〉を弁護したほか、後にはフェミニストとして妊娠中絶の自由化に尽力したことはよく知られている³⁶⁾。アリミの依頼に応じてボーヴォワールも参加し、1960年6月2日に『ル・モンド』紙に「ジャミラ・ブーパシャのために」と題する訴えを寄稿³⁷⁾。ミシェル・ドゥブレ首相はアルジェリアで新聞を差し押さえて弾圧する。6月には「ジャミラ・ブーパシャのための委員会³⁸⁾」が結成され、ボーヴォワール、アリミ、ティリオン、アニーズ・ポステル＝ヴィネーが司法大臣に面会するなど、抗議運動は急速に発展した。2年以上にわたった裁判はフランスだけでなく全世界からの注目を集め、この全記録を収録した『ジャミラ・ブーパシャ』は1962年に出版された³⁹⁾。

アルジェリア戦争の初期はもとより、拷問を認めないと宣言したド・ゴール政権下においても壮絶な弾圧は後を絶たなかったのだが、この時期になって植民地主義の非人道性が多くの人の目にも明らかになっていき、世論も少しずつ変化していった。拷問が植民地という体制そのものと無縁ではなかったというのがサルトルの変わらぬ見解であった。だが、このような植民地主義に加担しないためには、一般市民はどうすればよいのか。ここで不服従という主題が浮上する。

5 不服従

市民的不服従、あるいはより広く抵抗権はフランス革命の核心にあり、人権宣言によって明文化された。その意味でもフランスでは広く一般に浸透した価値であり、アルジェリア問題において、この考えが積極的に働いたのは決して偶然ではない。アルジェリア問題において不服従の中心にいたのが先ほど言及したフランシス・ジャンソンであることはよく知られている⁴⁰⁾。彼は1957年10月からFLNを支援し、フランス軍兵士の脱走を助ける非合法組織、いわゆる「ジャンソン機関」を立ち上げる⁴¹⁾。この組織は一方でFLNの最高機関であるアルジェリア人委員会と連携し、FLNのための資金調達や情報宣伝活動をし、他方でフランス青年の徴兵忌避や脱走を援助し、機関紙『……のための真実 (Vérités pour...)』も発行した。組織は少数の幹部によって担われ、末端では20代の学生、教員、芸術家、労働者などがアジトを提供するなどの支援をした。1960年に入ると、メンバーが当局によって次々と逮捕され、組織が明るみに出た。ジャンソン本人は辛くも国外に逃げたが、4月になってパリに密かに戻り、外国人記者会見を行い、正当性を主張した⁴²⁾。当初は、国家に公然と逆らうこの運動は左派からもまったく理解されなかった。共産党機関紙『ユマニテ』も週刊誌『エクスプレス』もジャンソンの活動を批判したが、『現代』は2・3月合併号に編集部の「フランス左翼とFLN」、4・5月合併号にはマルセル・ベジュの「恭しき左翼」⁴³⁾を掲載して支援しただけでなく、潜伏中のジャンソンからサルトルへの15頁におよぶ長文の手紙⁴⁴⁾も掲載。この手紙でジャンソンは、左翼と保守の両陣営からの批判に反論し、みずからの行動の意味を説明している。1) フランスとアルジェリアとの友好の可能性を維持する。2) フランスの左翼に真の役割と真の連帯の相手を自覚させる。3) 世界の世論に対してフランスの名誉とその伝統的価値を救う (p. 1536-1537)。この考えはサルトル自身の立場と重なっている

と言えるだろう。サルトルは6月に学生たちが逮捕された際にもインタビューで、まさに反抗する学生たちの支持を表明している⁴⁵⁾。この動きは次第に広まりを見せた。7月ごろから、モーリス・ナドー、ディオニス・マスコロ、モーリス・プランシヨ、ジャン・シュステルなどが中心となって、後に、「アルジェリア戦争における不服従の権利に関する宣言 (Déclaration sur le droit à l'insoumission dans la guerre d'Algérie)」として121人の知識人によって署名されることになる宣言文が秘密裏に回され始め、9月には外国のメディアにも公表された⁴⁶⁾。ジャンソン裁判を視野に入れたこの宣言は、アルジェリア戦争を独立のための正当な闘争として認めた上で、アルジェリア人の大義はすべての自由人の大義であり、闘争は植民地主義の大義に決定的な打撃を与えたと述べているとともに、フランス軍による拷問を非難し、フランスの良心的な反対者に呼びかけた。『現代』誌もこの宣言を掲載するはずだったが、差押の危険を考慮して、結局は空白の2ページの後に署名者の名前をアルファベット順に掲載したにとどまった。アンドレ・ブルトン、ヴェルコール、サルトルといった大物左翼の作家はもとより、次世代のロブ＝グリエなどヌーヴォー・ロマンの作家やトリュフォーなどヌーヴェル・ヴァーグの映画関係者、『現代』誌編集部のメンバー (ジャンソン、ペジュ) など121人の署名のほか、あとから参加したフランソワーズ・サガンら14人の名前も記されている。

9月5日に、ジャンソン機関に対する裁判がジャンソンは欠席のままパリの軍事法廷で開かれ、時の大臣アンドレ・マルロー、ヴェルコール、クロード・ロワといったレジスタンスとも関わる著名な作家も証人として喚問されていた (S. 下 865-872)。サルトルはブラジルに滞在していたため出廷はできなかったが、長文の手紙を書き送り、ジャンソンらの活動を自由と民主主義の原理の名の下に擁護し、その正当性を主張した⁴⁷⁾。10月1日の判決の結果は、ジャンソンに10年の禁錮刑、その他計17名にも8ヶ月から10年の禁錮刑だった。こうして、政府はアルジェリア独立を支持する自国民への弾圧を強めていったが、サルトルが以前にもジャクリーヌ・ゲルージとアブデルカデル・ゲルージ夫妻の擁護のためにも筆をとっていることを付記しておこう。1958年3月『現代』誌に発表された「われわれはみな人殺しだ⁴⁸⁾」である。ジャクリーヌはボーヴォワールのかつての教え子で、アルジェリア人と結婚。二人はFLNによる発電所爆破計画の共犯として死刑を宣告された。サルトルはこの判決に異議を唱え、

特赦を呼びかけている⁴⁹⁾。

自国民であれ、国に反抗する者は容赦なく弾圧するフランス政府のあり方はまさにファシズムそのものであった。それゆえ、3つ目のテーマはまさに内政の問題、とりわけド・ゴール批判となる。少し時計の針を巻き戻して、ド・ゴール登場前の1958年から見てみよう。

6 反ファシズム、反ド・ゴール

第四共和制下のフランスでは選挙制の構造もあり、安定した政権は生まれず、短期間で変わる状況は戦前と変わらなかった。その中でギー・モレ内閣は稀に見る長期政権であったが、それが妥協の産物であったことはすでに指摘した通りだ。1958年5月13日には「フランスのアルジェリア」を支持する現地軍人やコロンの暴動はなし崩し的にクーデターに発展し、落下傘部隊司令官マシュらによる「アルジェ反乱」が起こると、5月15日、サルトルは、J・カスー、ドムナック、A・フィリップらと共に、このクーデターを激しく非難する⁵⁰⁾。植民地駐屯の軍隊の反乱は、フランス本土侵攻の脅威を明らかにしたが、政府は有効な解決策を出せずに危機に追い込まれる。このような情勢で軍部を抑えることのできる唯一の人物と見なされたのが第二次世界大戦の英雄シャルル・ド・ゴールだった。右翼は彼が政界に復帰することを望み、世論もそれに追随するに至る。このようなフランスの政情に対するサルトルの明白な批判が、5月22日に『エクスプレス』に掲載された「志願者⁵¹⁾」である。この論考でサルトルは、国家を一人の人物に委ねることの危険を何よりも警告する。これ以降に発表されるサルトルのド・ゴール批判の基調は、民主主義の崩壊、独裁とファシズムの再来という主張に要約できるだろう。この時期からのサルトルは筆だけでなく、5月30日の反ド・ゴールのデモに参加するなど、示威行動も通して反ド・ゴールの姿勢を鮮明に打ち出す。

とはいえ、サルトルの主張は少数派の意見に留まり、議会はド・ゴールを首班として承認し、6月2日、憲法改正と首相への6ヶ月の全権付与が決定する。だが、ド・ゴールのいったい何が問題なのか、それを論じたのが、9月11日に滞在中のローマから『エクスプレス』誌に寄稿した「侮蔑の憲法⁵²⁾」である。サルトルが問題視するのは、ド・ゴールが憲法改正に関して、新憲法の草案を議会にかけようとせず、直接国民投票にかけ

ることを提案する点である。これは一見すると直接に民意を問うているようであるが、じつは国民には真の選択肢はなく、ただ問われた問いに諾か否かを言うことを強制されているにすぎない。民主主義の原理からすれば、この第五共和国憲法草案は押し付けでしかないのだ。サルトルは9月25日、再びイタリアから、「王さまをほしがる蛙たち⁵³⁾」を『エクスプレス』に送り、フランスの状態はもはや末期症状と診断する。しかし、サルトルのこのような主張は一般市民の心を掴むには至らなかった。人びとはこの泥沼から脱出できるのならば、なんでも受け入れる心理状態にあった。第4共和政にはうんざりで、一大変革が求められていた。かくして、9月28日、第5共和国憲法草案は国民投票によって圧倒的に支持され、ド・ゴールの独裁体制が確立、10月5日第五共和政が開始する。

その間、FLN側でも動きがあった。9月19日、穏健な民族主義者フェルハート・アッバースを議長としてアルジェリア共和国臨時政府 GPRA (Gouvernement provisoire de la République algérienne) が FLN によってエジプトのカイロで設立されたのである。その任務は FLN の外交上・政治上で代表し、国際政治舞台で支持を取り付けること、フランスとの最終的な交渉を行うことであり、本部はチュニスに置かれた⁵⁴⁾。

10月23日、ド・ゴールは記者会見で「勇者の平和」を提案するが、GPRAはこれを拒否する。12月21日、ド・ゴールは大統領に選出され、公式にド・ゴール体制が始まった。翌1959年春ごろから、フランス軍によるアルジェリアでの掃射、拷問、集団虐殺だけでなく、強制移住地区の惨状なども本国でも伝わるようになり、それと同時に、国内の弾圧も強まり、集会や言論の自由が狭められるようになる。9月16日、ド・ゴールはアルジェリアの民族自決権を国民投票にかけるという原則を発表し、10月11日にはクーヴ・ド・ミュルヴィル外相が FLN に停戦を呼びかけるなど、政府の態度は軟化していく。弱腰の政府に対して、植民地維持を目指す軍部右翼は反発を強め、右からの反ド・ゴール運動も活発になる。それが顕在化するのが、1960年1月18日のアルジェのマシュー将軍解任をきっかけとする一連の事件だ。マシュー将軍はド・ゴールの政策をドイツの新聞紙上で公然と非難したために解任されたのだが、これを不満とするアルジェリア在住のヨーロッパ人が24日、デモを組織、憲兵隊と衝突して、双方で22人の死者を出し、さらにデモ隊数百人はバリケードを

築いて立て籠もり、本国の政策変更を要求した（バリケードの一週間）。29日、ド・ゴールは、自決権承認は撤回しないものの、FLNと交渉はしないとテレビで言明。2月1日、バリケードは解除され、責任者は逮捕されたが、この頃から、アルジェリアはもとより、フランス本国でも暴力が遍在するようになる。

7 暴力と対抗暴力

サルトルが早くから主張していたように、植民地という体制が生み出した暴力が、その体制を転覆させるための対抗暴力としてのアルジェリア人の武装へ、さらにそれへのリアクションとしてのフランス人右翼の暴力へと負の連鎖を引き起こしたのである。こうして、1960年からフランス本国もアルジェリアもレベルの異なる暴力がぶつかり合う修羅場と化す。それにつれてサルトルの積極的な行動も増えていく。1960年6月10日からは3日間、アルジェリア平和のための全国大会に出席した⁵⁵⁾。

もちろんフランス政府も手をこまねいていたわけではない。FLN代表と停戦予備交渉を行うが不調に終わる。ド・ゴールはアルジェリア政策に関して再び国民投票という手段に訴えることになるが、サルトルは12月1日にポーヴォワールとともに記者会見を行い、拒否を呼びかける⁵⁶⁾。だが、1961年1月8日の国民投票で、今回もド・ゴールは圧倒的な支持を得る。サルトルは、すぐさま、インタビューで国民投票の分析を行い、ド・ゴールの問題提起の仕方を批判した⁵⁷⁾。

一方で、右翼にも大きな動きが生じる。2月に一部の政治家とアルジェリア駐留軍人によって、極右の軍事組織 OAS (Organisation de l'armée secrète) が結成されるのだ。OAS は「アルジェリアはフランスであり、それに留まる (L'Algérie est française et le restera.)」をモットーとし、独立を阻止するために武装闘争を行うことを目指し、早くも3月31日にエヴィアン市長を暗殺、その後、パリにおいてもテロが激化する⁵⁸⁾。また、それに呼応するように、アルジェリアで将軍たちの反乱が頻発し、いくつかの都市を掌握する事態にもなる。このようなテロ活動にどう対応すべきなのかについてもサルトルは発言しているが⁵⁹⁾、5月19日にはサルトルのボナパルト街のアパートも OAS により爆破されるという事件が起こっているし (S 562-563/下 899-900)、失敗したとはいえ、ド・ゴール暗殺すら

企てている。この間、仏政府はFLNと秘密交渉や正式交渉を何度も行なっているが、アルジェリア各地ではFLNがゼネストやデモを展開し、それを弾圧する際に数百人単位の犠牲者が生まれる。

そんな中で、パリで大惨劇が起こる。10月5日、パリ警視総監モーリス・パボン⁶⁰が夜間外出禁止令を出すと、FLNはそれに反発し、在仏アルジェリア人に向けて市中で独立要求のデモを行うことを呼びかけた。それに応じて、10月17日夜、約3万人のデモが起こり、発砲を許可された1万人の警官が出動⁶¹、多くのアルジェリア人を検挙したのみならず、多数の死者を出した⁶²。デモは18日、21日も続行した。サルトルはシュヴァルツらと、反ファシズム、反人種主義を掲げる追悼デモを18日に行うことを準備し、これを契機に反ファシズム連合（FAC）を結成することにした。サルトルが最も実践的に活動する時期であり、目前の暴力とどう向かうべきなのかが理論と実践のレベルで問題となる⁶³。1962年11月7日には再度ボナパルト街の自宅にプラスチック爆弾を仕掛けられ、居所を転々と変えるなど、ファシズムとの戦いは文字通り命懸けのものであった。彼の主張は、まさにフランスに勃興しつつあるファシズムに対抗し、ファシズム粉碎のための組織の必要性であること、また、アルジェリア問題がフランスの左翼にとって重要問題であることを説く⁶⁴。

その後も、多くの犠牲者を出す中、フランス政府とFLNはようやく妥協点を見出そうとしていた。両者はジュラ地方レ・ルースで一週間に及ぶ会談の末に合意に達し、2月18日停戦協定が調印される。サルトルはすぐさま「夢遊病者たち⁶⁵」を『現代』誌に発表し、第二次世界大戦のあとに書かれた「大戦の終末」と同様、停戦は平和ではないことを強調しているが、じっさい、戦争終結の明確な日付は存在しないとも言われる⁶⁶。3月7日から18日にエヴィアン会談が行われていた間にも、サルトルは61年3月12日ブリュッセルで「アルジェリアとファシズム」と題する講演を行っている。4月8日フランスではエヴィアン協定の是非を問う国民投票が行われ、圧倒的な賛成多数（有効票の約90%）でアルジェリアの自治権を承認した。ド・ゴールは問題を解決したと言える。ほぼ2ヶ月遅れの6月1日に今度はアルジェリア全土で住民投票が行われ、こちらも99.7パーセントの賛成で独立が決定した。こうして、アルジェリア戦争は終わったが、その後も多くの悲劇を生んだことはよく知られた通

りである。

まとめ

最後にサルトルとその周辺における余波なども交え、サルトルにとってのアルジェリア戦争の意味を確認したい。

第一に指摘したいことは、サルトルにとってアルジェリアの独立がきわめて重要であったことは間違いないとしても、それはより大きな植民地問題や第三世界の問題の枠内に当初はあったことである。1960年のブラジル旅行の際の講演がしばしばキューバ革命とアルジェリアを連動される形で展開していることもそれと関連している (CA 465/455; S 517-521/下 828-834)。また、他方で、アルジェリア戦争への関与は、フランスの進歩的知識人、あるいは左翼の運動と連動していたことも重要である⁶⁷⁾。すでに見たように、アルジェリア戦争時に『現代』誌を実質的に取り仕切っていたのは、53年以來編集陣に加わっていたマルセル・ペジュ (肩書きは *Secrétaire général*) であったが、1962年6月、編集委員会名義で彼の解任と、スイス亡命中のジャンソンの編集部参加が発表された。この件が6月16日『ル・モンド』紙に掲載されると、翌日ペジュは同紙に寄稿して、アルジェリア問題をめぐるサルトルとの意見の相違、とりわけペジュがFLNと親密すぎることが辞任を求められた主な理由だと述べた。『現代』誌がそれに対して翌日の『ル・モンド』紙で反論すると、ペジュは解任の理由を『現代』誌に発表するように要求。それを受け、その理由と経緯が掲載されるなど内輪揉めが世に知られた。この内紛はアルジェリア独立を支援する陣営も決して一枚岩ではなかった事実をはしなくも示している。ペジュがベン・ベラ派に深くコミットしていたのに対して、サルトルの関心は何よりもフランス左翼の再建という視点にあったことが記事からは窺える⁶⁸⁾。このことはすでに見たように、共産党や社会党は植民地問題については消極的であり、反植民地運動でサルトル自身が共闘したのが、しばしばカトリック左派であることも関わる。

第二は、『アルトナの幽閉者』の中に拷問の問題がきわめて重要なモチーフとして入っていったことはあるにしても、植民地問題は作家サルトルには大きな影響を与えなかったように見えることである。これはサルトルの周辺に話を限っても、アルジェリア戦争をテーマに、大作戯曲『屏風』

を61年に発表したジャン・ジュネと比べた時に感じることである。アルジェリア生まれで、独立戦争中に急逝したカミュの立ち位置はきわめて複雑なものであるから、ここでは触れることはできない。また、同時期のブランシヨの関与の仕方なども比較検討する必要があるだろうが、それも他日を期することにしたい。

第三は、反植民地運動の多くの活動の起点となったのが、サルトル自身というよりは周辺の人物だったことである。ある時期からサルトルがアルジェリア戦争にきわめて積極的に関与したことは間違いないが、その場合であってもイニシアティブを取っていたのは、近い若手知識人（ベジュ、ランズマン、ジャンソンら『現代』誌のメンバー）であったり、距離感のある作家（モーリアックらカトリック作家や、マスコロら一つ下の世代）だったケースが多い。また、サルトル自身はアルジェリアの状況を見に行くことはなかった。1961年3月ミラノでアルジェリア戦争反対の活動に対してオモニア賞を受賞するなど、西洋社会では評価されたとと言えるだろうが、近年の研究ではアラブ社会へのサルトルの影響は限定的であり、両義的であったとするものもある⁶⁹⁾。

アルジェリア戦争ではサルトル自身は当事者たちとの接触がほとんどなかった点がカストロやチェ・ゲバラと実際に会って話し合ったキューバの場合と決定的に違う⁷⁰⁾。マグレブ出身の作家たちとの交流も濃密には程遠かった⁷¹⁾。アラブ知識人の多くがサルトルを読んでいたとも言われるが、具体的な証言は少ない。アルジェリアの活動家たちは、キューバの革命家たちのようにサルトルの著作に夢中になったりしたのか。ランズマンが伝えるエピソードが参考になるだろう。多忙なサルトルの代わりに、FLNと直接コンタクトを取ったのは、クロード・ランズマンだったが、ファノンから、戦士たちが『弁証法的理性批判』を読んでいると聞いたランズマンが、実際に彼らに会ってみると読書会が行われたのはファノンが参加した一回だけだったという（LP 491-499/下 83-91）。サルトルとファノンとの出会いについても同様で、1960年夏、サルトルはすでに病魔に冒されていたファノンとローマで初めて会うが、お膳立てをしたのはすでにチュニスで数回ファノンと会っていたランズマンだった（LP 501-503/下 93-95）。サルトルにとって、アルジェリア戦争をめぐる政治的態度や、第三世界の脱植民地化や暴力の理解にファノンが大きな影響を与えたことは

間違いないが、ファノンとサルトルの関係、またエメ・セゼールとの関係については別稿で扱いたいと思う。

最後に記しておきたいことは、以上のアルジェリア独立戦争とそれに対するサルトルをはじめとするフランス知識人の活動を、同時代の日本のメディアや知識人がたいへん詳しく追っていたことだ。それは単なる知的好奇心や海外情報の提供といったレベルとはまったく異なる、倫理的な行動であり、今回調査して彼らの熱い思いが記事や翻訳を通して伝わってきた。心からの敬意を表したい。

[以下、続く]

*本論文は、JSPS 研究費 18K00462 (研究代表者、澤田直) の助成を受けたものであることを記し、感謝します。

参考文献および略号

本稿に類出する引用に関しては以下の略号を用いる。なお、既存の翻訳については多少変更をほどこしたものもある。

サルトルの著作

ES : Michel Contat et Michel Rybalka, *Les Écrits de Sartre*, Gallimard, 1970.

OR : *Œuvres romanesques*, édition établie par Michel Contat et Michel Rybalka avec la collaboration de Geneviève Idt et de George H. Bauer, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1980.

Sit. V : *Situations V*, Gallimard, 1964. 『シチュアシオン V 植民地の問題』, 人文書院, 1965.

その他

CA : *La Cérémonie des adieux*, suivi de *Entretiens avec Jean-Paul Sartre, août-septembre 1974*, Gallimard, 1981. シモース・ド・ボーヴォワール『別れの儀式』(朝吹三吉、海老坂武訳) 人文書院, 1984年。

FA : Simone de Beauvoir, *La Force de l'âge*, in *Mémoires*, tome I, sous la direction de Jean-Louis Jeannelle et d'Éliane Lecarme-Tabone, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2018. 『女ざかり』上・下 (朝吹登美子・二宮フサ訳), 紀伊國屋書店, 1963年。

FC : Simone de Beauvoir, *La Force des choses*, in *Mémoires*, tome I, tome II,

- sous la direction de Jean-Louis Jeannelle et d'Eliane Lecarme-Tabone, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2018. 『或る戦後』上・下 (朝吹登美子・二宮フサ訳), 紀伊國屋書店, 1965年.
- TCF : Simone de Beauvoir, *Tout compte fait*, in *Mémoires*, tome II, sous la direction de Jean-Louis Jeannelle et d'Eliane Lecarme-Tabone, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2018. 『決算のとき』上・下 (朝吹三吉・二宮フサ訳), 紀伊國屋書店, 1974年.
- HAC : Benjamin Stora, *L'histoire de l'Algérie coloniale 1830-1954*, La Découverte, 1991, rééd., 2 vols, 2004. バンジャマン・ストラ『アルジェリアの歴史』(小山田紀子・渡辺司訳) 明石書店, 2011年.
- LP : Claude Lanzmann, *Le lièvre de Patagonie*, Gallimard, coll. « Folio », 2009. クロード・ランズマン『パタゴニアの野兎 ランズマン回想録【下】』(中原毅志訳), 人文書院, 2016年.
- S : Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905-1980*, Gallimard, 1985. アニー・コーエン＝ソラル『サルトル伝 1905-1980』上・下巻 (石崎晴己訳) 藤原書店, 2015年.
- TM : *Les Temps Modernes*

注

- 1) サルトルとアルジェリア戦争に関する簡潔な見取り図を提供してくれる論考や記事としては以下のものがあり, 本稿もそれらから多くの示唆と情報を得た. Noureddine Lamouchi, *Jean-Paul Sartre et le tiers monde*, L'Harmattan, 1996. Abdelmajid Amrani, *Jean-Paul Sartre and the Algerian war 1954-1962*, Alger, Office des Publications Universitaires, 2004. Anne Mathieu, « Sartre en guerre d'Algérie : le combat pour la justice et la vérité », *Études sartriennes*, No. 9, 2004, p. 219-239. サルトルとアルジェリアについては同時代の日本の研究者やメディアはリアルタイムでそれを追っていた. 淡徳三郎『アルジェリア解放戦争: FLN (国民解放戦線) の七年半』(青木書店, 1962)をはじめ多くの文献があるがここでは参照したものだけにとどめる. 近年のものでは, 加國尚志「アルジェリア戦争以降の思想—ファノン, サルトル, フーコー, サイドー」『立命館大学人文科学研究紀要』85号, p. 81-96. 茨木博史「サルトルとアルジェリア戦争: アルジェリア側の視点からの再考」報告, 日本サルトル学会例会, 2019年9月19日. 茨木氏の口頭発表は本稿と近い関係にあるが, 残念ながら, 氏の発表そのものは視聴することができず, 竹本研史による報告(「日本サルトル学会会報第60号」)によってその概略を知り得ただけである.
- 2) 植民地アルジェリア, アルジェリア戦争については膨大な数の研究がある.

本稿で主に参考にしたのは以下のもの。Benjamin Stora, *L'histoire de l'Algérie coloniale 1830-1954*, *op.cit.* ギー・ペルヴィエ『アルジェリア戦争—フランスの植民地支配と民族の解放—』（渡邊祥子訳）白水社、2012年。

- 3) この点については以下の拙論を参照されたい。『〈呼びかけ〉の経験—サルトルのモラル論』人文書院、2002年。
- 4) OR, 235. 「部屋」（白井浩二訳）『水いらず』所収、新潮文庫、1971、p. 100.
- 5) OR, 49. 『嘔吐』（鈴木道彦訳）人文書院、2010、p. 69.
- 6) OR, 46. 『嘔吐』前傾書、p. 64.
- 7) OR, 776-780, 782-783, 788-790. 『自由への道』（『自由への道』3（海老坂武・澤田直訳）岩波文庫、2009、p. 99-104, 106, 109-112.
- 8) *Situations, I*, rééd. Nouvelle édition revue et augmentée par Arlette Elkaim-Sartre, 2010, p. 139. 「『異邦人』解説」（窪田啓作訳）『シチュアション I』人文書院、1965、p. 93.
- 9) サイドにはサルトルとの出会いについて書いたテキストがいくつかある。Cf. Edward W. Said, « Ma rencontre avec Jean-Paul Sartre », *Le Monde diplomatique*, septembre 2000, p. 4-5.
- 10) プレイヤード版の年譜によれば、9月1日から10月13日。Simone de Beauvoir, *Mémoires*, tome I, Gallimard, 2018, p. XCV.
- 11) ただし、1948年11月8日にモロッコの学生たちに招かれて、フランスの帝国主義を批判する講演を行なっている。「J.-P. Sartre aux Marocains : « Ceux qui vous oppriment, nous oppriment pour les mêmes raisons » », *La Gauche*, n°8, novembre 1948, p. 1, 3 ; ES 203. ボーヴォワールは、1949年7月にはネルソン・オルグレンとチュニジア、アルジェリア、モロッコを旅行している（FC I, 1125-1126/上 201）。また1954年1月から2月には当時の恋人ランズマンとアルジェリアからチュニジアを車で旅している。Cf. FC II, 23-26/下 25-27 ; LP 478-482/下 75-78.
- 12) サルトル自身は晩年のボーヴォワールとの対話で、植民地主義に対する批判は16歳のときに遡ると言っている。CA 464/454. 「根源的自由があり、それが16歳のほくに植民地主義を反人間的な残虐さ、物質的利益のために人間を破壊する行動と考えさせたのだ」
- 13) ES 288. この会議にはアルジェリア代表団も参加していて、アルジェリアの反乱の現状についての報告もあった。「サルトルはこの問題に関する知識が十分にはなかったので、発言はしなかったが、植民地主義の枠内ではいかなる有効な経済改革も実現しえないことを知っていた」（FC II, 51/下 52）とボーヴォワールが書いていることには注目したい。
- 14) « Refus d'obéissance », TM, n°118, octobre 1955.
- 15) « L'Algérie n'est pas la France », Jean Cohen, « Colonialisme et racisme en

- Algérie », Mohamed-Chérif Sahli, « De l' "assimilation" à l' "intégration" : une mystification politique », TM, n°119, novembre 1955.
- 16) マルセル・ペジュ (Marcel Péju, 1922-2005) はその後も妻ポーレットとの共著『ネズミ狩り』 (*Les ratonnades à Paris*, Maspero, 1961) を執筆するなど積極的な関与を続ける。ただし、本は書店に並ぶ前に印刷所で当局に押収された。Raton は俗語でマグレブ人の蔑称で、ratonnade はマグレブ人への弾圧を意味する。
 - 17) ダニエル・ゲラン (Daniel Guérin, 1904-1988) は歴史家、批評家、革命家で、モロッコの民族主義運動を支援、ベン・バルカ誘拐事件の真相究明に力をいれるなどの実践家であっただけでなく、理論家としても知られ、とりわけ政治思想史研究に大きな業績を残した。1965年には『アルジェリアは軍事独裁化されたか?』というパンフレットで、ブーメディエン体制について興味深い分析を提示するなど、北アフリカへの関心は長く続いた。また、68年の五月革命後も戦闘的アナキストとして平和運動を行ったり、同性愛者の人権回復にも尽力した。サルトルとの関係は微妙で、サルトルは『方法の問題』でゲランのフランス革命に関する著書 (*La lutte des classes sous la première République*, Gallimard, 1946) を留保つきながら評価し、用いているほか、二人の間では論争もあった (Sartre, « Réponse à Daniel Guérin », TM, n°142, décembre 1957)。ゲランには植民地主義やアルジェリアに関して以下のような著作がある。 *Ci-gît le colonialisme*, Mouton, 1973 ; *Quand l'Algérie s'insurgeait*, La Pensée sauvage, 1979.
 - 18) Daniel Guérin, *Pitié pour le Maghreb*, impr. Chantenay, 1953. その抜粋は TM, n°87 janvier-février 1953 に掲載されている。
 - 19) Robert Barrat, « Un journaliste français chez les « hors-la-loi » algériens », *France Observateur* le 15 septembre 1955. バラはカトリック知識人会の元書記長でもあった。
 - 20) Colette et Francis Jeanson, *L'Algérie hors la loi*, Ed. du Seuil, 1955. この書およびその前後の状況のサルトルとポーヴォワールの反応については以下を参照。FC II, 41-42/ 下 42-43.
 - 21) 参加者の発言は *Guerre d'Algérie & colonialisme* という 91 ページの冊子としてまとめられている。ゲランは、*L'Algérie n'a jamais été la France* (私家版) でも出版している。
 - 22) アルジェリア戦争と知識人の関わりに関しては多くの研究があるが、日本語として読めるものとして、以下の論文を挙げておく。桜本陽一「アルジェリア戦争とフランス知識人」『情況』第二期 9(2), 1998年, p. 48-66.
 - 23) « Le colonialisme est un système », TM, n°123, mars 1956, p. 1371-1386 ; repris dans *Siz. V. Cf. S.* 下 764-768. セゼールの発言は, « La mort

- des colonies », TM, n°123, p. 1366-1370 ; repris dans Aimé Césaire, *Ecrits politiques, II. 1935-1956*, Jean-Michel Place, 2016, p. 342-345. この号にはその他に、アルジェリアにおける就学の問題を論じた次の論考も掲載されている。Claude Duchet, « La scolarisation de l'Algérie », p. 1387-1426.
- 24) ギー・モレ政権の誕生そのものが中道左派勢力の結集の失敗の結果であり、当時の政治状況は錯綜していた。
- 25) その他には以下のようなものをはじめ多数ある。Angelo del Boca, « Un envoyé spécial dans l'Aurès », n°120 ; Mostefa Lacheraf, « Le nationalisme algérien en marche vers l'unité », n°125, 127-128 ; Jean-Luc Tahon, « En "Pacifiant" l'Algérie », n°137-138. 後にはファノンのアルジェリアについての論考も掲載されている。Frantz Fanon, « La minorité européenne d'Algérie », n°159-160.
- 26) ジョルジュ・マッテイ (Georges Mattei, 1933-2000) が過酷なアルジェリアの状況を報告した「カビリアの日々」(« Jours Kabyles », TM, n°147-148) もその一例だ。
- 27) ただし、散発的な発言はある。例えば、1957年1月号の「スターリンの亡霊(2)」において、フランス共産党の復活のために、また、労働者の二大政党が共同戦線を実現するためには、アルジェリア戦争反対の運動に大衆を動員することが必要条件だというくだり。 *Situations, VII*, Gallimard, 1965, p. 306. 『シチュアション VII』白井浩司訳, 1966, p. 241. この前後、サルトルはテイントレット論など、アルジェリアとは無関係の仕事を淡々と続けている。ポーヴォワールの『或る戦後』の第8部から第11部はアルジェリア戦争の時期に当たっており、サルトルの動向もそれによって知ることができる。細かくページ数はあげないが、随時参照した。
- 28) « Portrait du colonisé », TM, n°137-138, juillet-août 1957, p. 289-293, repris dans *Sit. V*.
- 29) Comité résistance spirituelle, *Des rappelés témoignent*, impr. de Chaffiotte-Ruaud, 1957. 前書きには、そのほかに哲学者ポール・リクールほか70ほどの署名がされている。日本では両者を併せて翻訳刊行された。ジャン・ミュレール他『太陽の影—アルジェリア出征兵士の手記』鈴木道彦・二宮敬・小林善彦訳, 青木書店, 1958年。その他に以下のものをはじめ多くの証言がある。モリアンヌ『祖国に反逆する—アルジェリア革命とフランス青年』(淡徳三郎訳) 三一書房, 1960年。ジュール・ロワ『アルジェリア戦争—私は証言する—』(鈴木道彦訳) 岩波新書, 1961年。
- 30) « Vous êtes formidables », TM, n°135, mai 1957, p. 1641-1647 ; repris dans *Sit. V*. 当初のタイトルは « Une entreprise de démoralisation » だった

が、一般市民の些細な行動を賞賛するラジオ局ウーロップ1の視聴者参加式の人気番組« Vous êtes formidables »がアイロニーを込めて用いられている。タイプ原稿はBNFにある。コーエン＝ソラルはこの番組について詳細に描写しながら、この記事について言及している。S 471-477/下 753-762。

- 31) Henri Alleg, *La Question*, Minuit, 1958. アンリ・アレグ『尋問』（長谷川四郎訳）みすず書房、1958年。
- 32) « Une victoire », *L'Express*, 6 mars 1958, repris, dans *Sit.* V, 72-88. ES 316-317.
- 33) のちに、両者を併せた本がスイスで出版され、1966年には Pauvert 出版から再版もされる。両者については、鈴木道彦が『太陽の影』の後書きで詳細に論じている。後に以下に再録。鈴木道彦『アンガージュマンの思想』晶文社、1969, p. 169-191。プレーストとサルトルの研究者、鈴木道彦はアルジェリア独立戦争に直接関係した点でも言及すべきことは多いが、これについては別の機会に譲りたい。Cf. 鈴木道彦『越境の時—1960年代と在日』集英社、2007。
- 34) *Témoignages et documents sur la guerre d'Algérie*, document n°5, numéro spécial juin. ES 320-321.
- 35) サルトル作品における拷問については以下の研究に詳しい。Juliette Simont, « Ils se taisaient et l'homme naissait de leur silence : À propos de la torture dans l'œuvre de Sartre », TM n°643-644, p. 174-191.
- 36) Gisèle Halimi, Annick Cojean, *Une farouche liberté*, Livre de poche, 2021. ジゼル・アリミ／アニック・コジャン『ゆるぎなき自由』（井上たか子訳）、勁草書房、2021年、p. 49-54.
- 37) 『ル・モンド』紙は表現の修正を要請したが、ボーヴォワールは断固拒否したという。cf. FC II, 221/下 230。ジゼル・アリミ前掲書、p. 52-53.
- 38) サルトル、アラゴン、エルザ・トリオレ、ガブリエル・マルセル、エメ・セゼール、ラグルア・ウェイユ＝アレ、ジェルメーヌ・ティヨン、フランソワーズ・サガン、数学者ローラン・シュヴァルツ、ジュヌヴィエーヴ・ド・ゴール＝アントニオーズ（ド・ゴールの姪）などの名が連なっている。
- 39) Simone de Beauvoir, Gisèle Halimi, *Djamila Boupacha*, Gallimard, 1962. 『ジャミラよ朝は近い—アルジェリア少女拷問の記録』手塚伸一訳、集英社、1963年。原著には多くの証言だけでなく、ピカソによる肖像、ラブジャード、マッタといった画家たちのオマージュも収録され、世論を喚起する狙いがよくわかる。
- 40) カミュ＝サルトル論争のきっかけとなったのが、『現代』誌に発表されたカミュの『反抗的人間』を批判したジャンソンの書評であることはよく知られている。だが、ジャンソンは、サルトルと知り合う前に、アルジェリアでカミュ

と知り合っている仲でもあった。アルジェリアに関しては以下の書もある。
Francis Jeanson, *La révolution algérienne : problèmes et perspectives*, Feltrinelli, 1962.

- 41) *Le Procès du réseau Jeanson* [devant le Tribunal permanent des Forces armées de Paris, 5 octobre-1er septembre 1960], présenté par Marcel Péju, F. Maspero, 1961. Jeanson, *Algéries : de retour en retour*. 日本で読めるものとしては以下のものなどがある。矢内原伊作『サルトル—実存主義の根本思想』中公新書, 1967 (第5章「アルジェリア戦争とジャンソン裁判」p. 83-108). なお, サルトルはこの機関の発足当時はジャンソンとは疎遠になっていたために, 関係はなかったが, ジャンソンの要請を受けて支援を惜しなかった (S 503-504/ 下 806-807). Cf. Francis Jeanson, *Sartre dans sa vie*, Seuil, 1974, p. 213, sq. その中でジャンソンは, アルジェリア問題に対するサルトルの態度を分析しており, 興味深い。
- 42) FC II, 220-221/ 下 229. その際, 同席したために犯人隠匿で告訴されたバリ・プレス紙の記者アルノーの擁護のためにサルトルは 1960 年 6 月 17 日法廷に立っている。Cf. FC II, 222/ 下 231.
- 43) Marcel Péju, « Une gauche respectueuse », TM, n°169-170, avril-mai 1960, p. 1512-1529.
- 44) Francis Jeanson, « Lettre à Jean-Paul Sartre », TM, n°169-170, avril-mai 1960, p. 1535-1549.
- 45) K. S. Karol によるインタビューが掲載されたのは, アルジェリア戦争に関する情報誌『真実—自由』(« Un entretien avec Jean-Paul Sartre : Jeunesse et guerre d'Algérie », article-interview de K. S. Karol, *Vérité-Liberté : cahiers d'information sur la guerre d'Algérie*, n°3, juillet-août.). これは 1960 年 5 月に発刊された月刊誌 (実際には月刊では出ていないが) 1962 年 6-7 月号まで全部で 20 号出ている。全号が BNF でマイクロフィルムの形で閲覧可能だが, 新型コロナウイルスの影響で出張が叶わなかったために参照することができていない。また, イギリスの週刊誌 (*The New Statesman and Nation*) の 6 月 25 日号にも “Sartre on violence” として一部掲載され, それは『世界』1960 年 9 月号に「サルトルとフランスの若者たち」(内山敏訳) として訳出されている。
- 46) Cf. CA 466-467/455-456 ; S 536-540/ 下 858-864. Catherine Brun, « Genèse et postérité du “Manifeste des 121” », *L'Esprit Créateur*, vol. 54, No. 4, *The Algerian War of Independence and its Legacy in Algeria, France, and Beyond*, Winter 2014, p. 78-89.
- 47) « La lettre à l'audience », *Le Monde*, 22 sept 1960. *Le Procès du réseau Jeanson*, présenté par M. Péju (Maspero). 「フランス民主主義のために」(酒

- 井伝六訳)『朝日ジャーナル』1960年10月30日号, p. 70-71. ボーヴォワールの自伝では、実際には電話で、ランズマンとベジュに口述筆記されたものが9月20日弁護士のデュマによって法廷で代読されたとされている(FC II, 2667/下 272)が、後にランズマンは、ベジュがサルトルの意図とは無関係に自分の主張を大幅に入れた捏造文であることを暴露している。LP 484-485/下 p. 80-81.
- 48) « Nous sommes tous des assassins », TM n°145, mars 1958, p. 1574-1570. Repris dans *Sit. V*.
- 49) また、こちらはアルジェリア人の擁護であるが、1957年11月16日、対仏協力者アリ・シュカルを暗殺したベン・サドックの裁判でも被告側人として出廷している。
- 50) « Tous unis contre le Coup d'État », *France Observateur*, 15 mai 1958. 「愚かなクーデタ」『世界』1958年7月号。
- 51) « Le prétendant », *L'Express*, n°362, 22 mai, 1958 ; repris dans *Sit. V*.
- 52) « La constitution du mépris », *L'Express*, 11 septembre 1958; repris dans *Sit. V*.
- 53) « Les grenouilles qui demandent un roi », *L'Express*, 25 septembre, 1958 ; repris dans *Sit. V*.
- 54) HAC II 61-62/ 285-286. フランツ・ファノンもそれに加わり、ガーナ大使などの役職についている。『現代』誌はランズマンとベジュを代表として、チュニスに送って、GPRAとの接触を図っている。
- 55) 2日のミュチュアルでの集会は禁止されたとボーヴォワールの自伝にはある。Cf. FC II, 222/下 231.
- 56) その内容は以下の記事で報じられる。「La gauche doit répondre “non” au référendum », *Libération*, 2 décembre 1960. Voici le but à atteindre », *L'Express*, 8 décembre 1960. ES 358.
- 57) « L'Analyse du référendum », interview, *L'Express*, 4 janvier 1961. ES 362. 国民投票の分析、アルジェリア問題と植民主義に関する持論は以下のインタビューでも展開されている。「Entretien avec Jean-Paul Sartre », interview par Deville, Arrieux, Labre. *La Voie communiste*, nouvelle série, n°20, février 1961. ES 363.
- 58) 惨劇はアルジェリアとフランスだけでなく、コンゴでも2月にはパトリック・ルムンバが惨殺される。
- 59) « Comment faire face au terrorisme », entretien avec Gilles Martinet, *France Observateur*, 18 mai 1961. ES 366.
- 60) パボンはヴィシー政権下で1942年から44年の間にジロンド県在住の1560人のユダヤ人をドイツ当局に引き渡した悪名高い人物である。

- 61) この虐殺に関しては以下の文献に詳しい。Marcel Péju, Paulette Péju, *Le 17 octobre des Algériens*, La Découverte, 2011. 2021年マクロン仏大統領が、1961年10月17日のアルジェリア人虐殺事件から60年の機会に、犠牲者を追悼して当時の現場で花束を捧げたことは記憶に新しい。2012年には当時のオランダ仏大統領が、現場で「血塗られた抑圧があった」と演説した。
- 62) 政府は当日のアルジェリア人の死者は3人と発表した但、実際には約40人が死亡したと言われる。
- 63) その主張は以下のシュヴァルらとの討議に読むことができる。「Répondre à la violence par la violence? », *France Observateur*, 1^{er} février 1962.
- 64) *L'Express*, 15 mars 1962 に一部再録。「Entretien avec Jean-Paul Sartre, interview par Jean-Paul Nauray », *Tribune étudiante*, N°5-6, janvier-février 1962 « Intervention aux assises de la Ligue d'Action pour le Rassemblement antifasciste » (Bulletin intérieur du FAC, N°1, février-mars) など。
- 65) « Les somnambules », TM, n°191, avril 1962, p. 1397-1401. ES 378.
- 66) ギー・ペルヴィエ『アルジェリア戦争』前掲書, p. 133.
- 67) 当時のサルトルについての状況に関する興味深い回想として以下のものがある。Michel-Antoine Burnier, « On ne peut pas être sartrien, on ne peut pas être anti-sartrien », TM, n°531-533, octobre-décembre 1990, p. 906-950.
- 68) Cf. TM, n°193, juin 1962 ; « Réponse de Sartre à une lettre de Marcel Péju », dans « Correspondance », TM, n°194, juillet 1962, p. 182-189 ; LP 485/ 下 81. ES 379.
- 69) Yoav Di-Capua, *No Exit : Arab Existentialism, Jean-Paul Sartre, and Decolonization*, The University of Chicago Press, 2018, p. 158.
- 70) ブラジル旅行中には、GPRA 代表と会見をしているが、それも先方の意向を受けてのことだった。Cf. CA 465/455; S 517/ 下 828.
- 71) カテブ・ヤシンには、「ほくはサルトルのことを友人だと思っている」で始まるサルトルとの交流についての短いテキストがある。夢と現実が混ざった話で、アルジェリア戦争時のサルトルの支援に対する感謝も表明している。Kateb Yacine, « Un bagage explosif », *Jeune Afrique*, n°205, 8 novembre 1964, repris in *Minuit passé de douze heures, écrits journalistiques 1947-1989*, Seuil, 1999, p. 234.